沖縄のキャリア教育から平和を考える

開催日：2025 年 12 月 21 日（日）於：沖縄科学技術学院大学（OIST）

基調講演：　金　鉉哲（Kim, Hyuncheol）（韓国青少年政策研究院前院長）
　　喜屋武裕江（社団法人 グッジョブおきなわプロジェクト代表）
実践報告：　座覇真理子（株式会社 JOY ON 代表取締役）
パネリスト：　三村隆男（早稲田大学名誉教授）
　　宮古紀宏（国立教育政策研究所総括研究官/生徒指導・進路指導研究センター副センター長）
　　岡部　敦（清泉大学准教授）



【開会の挨拶】

三村隆男（早稲田大学）

キャリア教育と平和はどのように結びつくのか。この問いは、私の原点です。その具体像が見え始めたのは 2012 年です。その年、韓国青少年政策研究院の金鉉哲氏が来日し、日本のキャリア教育を視察され、その後、韓国では、進路専担教師制度や進路教育法の制定が導入されました。同じ年、沖縄でキャリア教育を実践する喜屋武裕江氏と出会いました。当時厳しい状況にあった沖縄で、彼女は「キャリア教育で地域を変える」という強い意志を示し、地域の大人の働く姿を学びに結びつける実践は、子どもたちに生きる実感を育んでいました。その後、座覇真理子氏をはじめ多くの方々と協働し、地域全体で支えるキャリア教育の可能性を実感しました。格差を外から測るのではなく、自ら向き合い乗り越える課題として捉え直すこと。そこにこそ、キャリア教育と平和を結ぶ鍵があります。2025 年、この沖縄の地で日韓ラウンド・テーブルが開催されることは、沖縄のキャリア教育が地域を越え、国を越え、平和を語る教育として新たな段階に入ったことを意味しています。本日の対話が、違いを越えて尊厳ある未来を共に構想する時間となることを願い、開会の挨拶といたします。

【基調講演1】

金　鉉哲（Kim, Hyuncheol）（韓国青少年政策研究院前院長）

本当は最初、韓国語でお話ししようと思っていたのですが、日本語で進めてほしいということで、今日は日本語でお話しさせていただきます。少し聞きづらいところもあるかもしれませんが、ご了承ください。

私はこのラウンド・テーブルに、今回で8回目の参加になります。第1回目から三村氏、岡部氏とご一緒させていただき、本当に長いご縁をいただいております。初回のラウンド・テーブルでは、喜屋武氏から沖縄の実践をご紹介いただきました。こうして縁が続いて、今日この沖縄まで来ることができたことを、とてもありがたく思っています。

それでは、私の話に入らせていただきます。今日のテーマは少し複雑です。韓国におけるキャリア教育の歴史を振り返りながら、ラウンド・テーブルの歩み、そして平和とキャリア教育の関係についてお話しします。その中で、私自身が考えている「キャリア教育 5.0」という考え方についても触れたいと思います。無理に結びつけるのではなく、もともとつながっている話だということをご理解いただければと思います。

まず、韓国のキャリア教育の歴史についてです。一般的には、導入期、成長期、発展期、成熟期という4段階で説明されることが多いのですが、私は導入期と成長期をまとめて「キャリア教育 1.0」と捉えています。この時期は、進学中心で、キャリア教育は義務ではなく、実践も限られていました。

大きな転機は2009年改正教育課程です。これによって「創意的体験活動」が導入され、キャリア教育が学校教育の中で位置づけられるようになりました。ここからが、いわばキャリア教育 2.0 の時期です。この時期には、キャリア教育を担当する「進路進学相談教師」、いわゆるキャリア教師が中学校・高校に配置されるようになりました。現在では、ほぼすべての中学校・高校に配置されています。

さらに2014年頃から、進路・職業体験支援センターが全国に設置され、学校を支援する体制が整えられました。そして2015年にはキャリア教育法が制定され、制度的な基盤がより強化されました。中学校では自由学期制も導入され、キャリア教育に一定の影響を与えています。

その一方で、支援が十分に届いていない層も存在します。経済的に厳しい状況にある子どもたち、異文化背景をもつ子どもたちへの支援は、まだ十分とは言えません。2025年からは、高校において、生徒が自分で科目を選択する制度も始まりました。方向性としては重要だと思いますが、依然として進学競争が激しく、キャリア教育との整合性には課題が残っています。

次に、私が「キャリア教育 3.0」と呼んでいる「教科とキャリア教育との連携」の段階です。これは、「キャリア教育は誰の仕事なのか」という問いに関わる問題です。キャリア教育は、特定の一人の教師が担うものではなく、すべての教師が関わるべきものです。そのためには、教科とキャリア教育をつなぎ、連携したプログラムを作る必要があります。

また、学校単独の取り組みから、地域社会との連携へと広がってきたことも重要な変化です。これを私自身は「キャリア教育4.0」と呼んでいますが、2.0、3.0、4.0は段階的に切り替わるものではなく、現在は同時に進行しています。成果もありますが、限界も依然として存在しています。

特に大きな課題は、キャリア教師のアイデンティティの問題です。キャリア教師は何をどこまで担うのか、その役割は学校によって、また教師個人によって大きく異なっています。この問いは、「キャリア教育とは何か」という問いそのものと重なっています。

また、体験活動の在り方についても課題があります。施設や博覧会、さまざまな体験プログラムが整備されてきましたが、体験が「やるだけ」で終わってしまうことも少なくありません。キット化された体験や外部委託が進む中で、「考えさせる」仕組みが十分でない場合もあります。体験そのものが悪いわけではありませんが、その意味づけが重要だと考えています。

最後に、私が考えている「キャリア教育 5.0」について簡単に触れます。

キャリア教育 5.0 とは、単に職業を選ぶための教育ではありません。激しい競争社会の中で、多様な価値

観を認め合い、一人一人が自分の人生に尊厳をもって生きることができる社会をつくるための教育です。その意味で、キャリア教育は平和と深く結びついていると、私は考えています。

ラウンド・テーブルも 2017 年の第 1 回から東京、ソウル、釜山、オンラインで開催されながら、異文化社会の問題に触れるなど、今回の沖縄に至るまで、徐々にキャリア教育と平和を結びつけてきました。
沖縄という、平和の歴史を強く体感できるこの場所で、こうした議論ができること自体に、多くの示唆を与えると思っています。 次回は、引き続き、沖縄と共通点の多いチェジュ島で、平和のことをさらに深く議論することを目ざしています。この対話を続けていくことが大切だと感じています。ご清聴ありがとうございました。

【基調講演2】

喜屋武裕江（(社)グッジョブおきなわプロジェクト代表）

年末のお忙しい中、また遠方より沖縄までお越しいただき、本当にありがとうございます。ご紹介にあずかりました、一般社団法人グッジョブおきなわプロジェクトの喜屋武裕江と申します。

本日は、株式会社ジョイオン設立 5 周年、そして私ども一般社団法人グッジョブおきなわプロジェクト設立 10 周年という、大切な節目の年に、この日韓ラウンド・テーブルを開催できましたことを、心からうれしく思っております。これまでご支援いただいたすべての皆さまに、この場をお借りして感謝申し上げます。

受付に飾られているお花は、沖縄県立南部農林高校の生徒さんが心を込めてアレンジしてくださったものです。こうした一つ一つの関わりが、私たちの活動を支えてくれています。

さて、私が沖縄でキャリア教育に関わり始めたのは 2008 年のことです。当時、沖縄県のキャリア教育モデル事業に、プランナー兼講師として関わらせていただきました。2011 年からは県の推進事業として本格的に展開され、県民運動とも連動しながら取り組みが広がっていきました。その活動は公的にも評価され、2014 年には文部科学省・経済産業省のキャリア教育推進連携表彰において優秀賞をいただきました。

その後、活動をさらに発展させるため、2015 年に一般社団法人としてグッジョブおきなわプロジェクトを設立し、現在に至っています。その節目の年に、「沖縄のキャリア教育から平和を考える」というテーマでこの会を開催できたことは、私たちにとって非常に大きな意味を持つ、示唆的なものでした。

沖縄は、その歴史的背景や地理的特性から、平和について考えることが日常の中にある地域です。キャリア教育は、単に職業を選択する力を育てるだけでなく、社会の中で自分らしく生き、他者と協働し、平和な社会を築くための主体性を育む教育だと、私は考えています。

ここで、沖縄の地理的・歴史的特徴について簡単に触れたいと思います。沖縄県は東西に長く、北から南まで約 400 キロ、離島を含めると非常に広い範囲にわたっています。日本列島の南の玄関口として、古くからアジア諸国との交流を通じ、多様な文化が交わる独自の文化を育んできました。また、第二次世界大戦後の米国統治の影響も色濃く残る、国内外の文化が交錯する特別な地域でもあります。

こうした背景は、現在の社会課題にもつながっています。沖縄県は、全国平均を上回る完全失業率、特に若年層の高い失業率、そして高い離職率といった課題を抱えてきました。県民所得も全国最低水準であり、子どもの貧困率は約 3 割に達しています。高等教育機関への進学率も、全国平均にはまだ届いていません。

子どもたちが生まれ育った環境によって、夢や希望を持つ機会が奪われてしまう。この現実と向き合うことが、私たちの活動の出発点です。キャリア教育は、この格差の連鎖を断ち切るための重要な手段だと考えています。

また、沖縄では求人と求職のミスマッチも大きな課題です。かつては学歴や資格が重視されていましたが、現在では、社会で活用できる力や主体性、協働性といった力が企業から求められています。こうした力を育むためにも、キャリア教育は欠かせません。

私たちの活動は、国の沖縄振興計画や沖縄県の各種計画とも連動しています。現在進行中の沖縄こど

も・若者計画では、「誰一人取り残されない社会」の実現が掲げられており、キャリア教育はその基盤となる施策として位置づけられています。私自身も、内閣府沖縄振興審議会や県の計画策定に関わる中で、現場の声を政策に届ける役割を担っています。

私たちの活動の根底にあるのは、沖縄の言葉で「助け合い」「協働」を意味する「ゆいまーる」の精神です。行政や学校だけでなく、企業、地域、NPO がそれぞれの強みを持ち寄り、子どもたちを支える仕組みづくりを進めてきました。

その象徴的な取り組みが、沖縄型ジョブシャドウイングです。子どもたちが地域の大人、つまり「メンター」と出会い、働く姿に触れながら「働くとは何か」を考える機会をつくってきました。2009 年に宮古島でモデル事業を始め、現在では 26 市町村に地域連携型キャリア教育の仕組みが広がっています。

子どもたちが地域に支えられた経験を通して、自己有用感や地域への愛着を育み、将来は支える側として地域に戻ってくる。その循環をつくることが、私たちの目指すキャリア教育です。

さらに、小中学生を対象とした産業人材育成事業、高校生を対象とした専門性の高い人材育成事業へと、切れ目のないキャリア教育の体系化を進めてきました。その中で、コーディネーターの育成と配置、そして長期的な追跡調査による効果検証を重視しています。

追跡調査の結果、キャリア教育が子どもたちの自己肯定感や将来への希望、地域への愛着に実質的に貢献していることが、データとしても示されてきました。これらの成果は、県の施策や計画にも反映され始めています。

沖縄のキャリア教育は、平和を「教える」ものではありません。人と人がつながり、支え合い、自分の生き方を主体的に選び取る力を育てる中で、結果として平和な社会を築いていく教育だと、私は考えています。本日の議論が、その先につながっていくことを願っております。ありがとうございました。

【実践報告】

座覇真理子（株式会社 JOY ON 代表取締役）

本報告では、沖縄県北中城村において実施してきた地域連携型キャリア教育の取り組みについて、その背景、仕組み、実践内容、評価、そして今後の意義についてご報告いたします。私は大分県別府市出身で、沖縄に移住してから十五年間、地域と学校をつなぐキャリア教育支援に携わってまいりました。2011 年より県内各地で実践を重ね、2020 年に株式会社 JOY ON を創業し、現在は地域連携型キャリア教育と専門高校支援を主な事業として活動しております。

北中城村は人口約 18,000 人の小規模な自治体で、自然や文化財に恵まれ、農業や観光といった地域資源が豊富に残る地域です。女性長寿日本一として知られるなど、地域文化や人のつながりが色濃く残っている一方で、将来の地域を支える人材の育成や、産業の担い手不足といった課題を抱えています。こうした課題は、北中城村に限らず、沖縄県全体、さらには全国の多くの地域にも共通する問題です。そのため北中城村では、「学校だけに任せるのではなく、地域全体で子どもを育てる仕組みが必要である」という認識が共有され、キャリア教育を軸とした人材育成に本格的に取り組むこととなりました。

その中核となっているのが「北中城村グッジョブ地域連携協議会」です。この協議会は村長が会長を務め、行政、学校、地域の事業所、大学、PTAなど、産学官と地域が幅広く参画しています。人材育成について、立場や専門の異なる大人たちが同じテーブルにつき、継続的に話し合う場が設けられていることが、この取り組みの大きな特徴です。私たちコーディネーターは、その調整役として、学校と地域、子どもと大人をつなぎ、対話と協働が途切れないよう支えています。

北中城村のキャリア教育は、小学校から高校までを見通した一貫した取り組みとして構成されています。小学校では、地域の仕事や働く大人と出会う体験を重視し、「仕事は身近な社会を支える営みである」ことを実感できるようにしています。中学校では、地域の課題や社会の仕組みについて学び、自分自身と社会と

の関係を考える学習を行います。そして高校では、自身の興味や特性を踏まえながら、進学や就職など具体的な進路を主体的に考える段階へと進んでいきます。このように発達段階に応じて学びを積み重ねることで、子どもたちが将来を見通しながら、自分の人生を考えられるよう工夫しています。

これまでに約 13,000 人の児童生徒がプログラムに参加し、協力してくださった事業所は延べ約二千か所にのぼります。学校と地域が継続的に関わることで、互いに信頼関係が育まれ、実践が年々深まってきました。また、年間計画の中に位置づけることで、単発的な行事ではなく、教育活動として定着している点も重要です。

本実践の大きな特徴の一つは、取り組みを行って終わりにするのではなく、振り返りと改善を重視している点です。毎年度、児童生徒、教員、保護者、協力事業所を対象にアンケートや聞き取り調査を実施し、実践の成果と課題を確認しています。さらに 2019 年からは、高校卒業時の生徒を対象とした追跡調査を開始しました。卒業後の進路状況や考え方を改めて聞くことで、小中高校期に経験したキャリア教育が、その後の人生にどのように影響しているのかを丁寧に見つめています。

調査結果からは、「仕事を通して誰かの役に立てることが分かった」「学校で学んでいることが将来の仕事や生活につながっていると感じた」といった前向きな声が多く寄せられました。一方で、「自分の特性をもっと知りたかった」「進路に悩んだとき、どこに相談すればよいか分からなかった」といった声もあり、自己理解や相談体制に関する課題も明らかになりました。これらの結果は、県教育委員会や学校現場と共有され、キャリア教育や進路指導の内容改善、支援体制の見直しにつながっています。

また、追跡調査や聞き取りの過程で、生徒自身が過去の経験を振り返り、「あの時の体験が今も心に残っている」「生まれ育った地域で多くの大人に関わってもらえたことが、今の自分を支えている」と語る場面も多く見られました。調査そのものが、生徒にとって自分を見つめ直し、将来について考え直す機会となり、次の一歩を考えるガイダンスとしての役割を果たしていることを実感しています。

これまでの実践を通して、地域で経験した一つ一つの学びは、すぐに成果として表れるものではなくても、将来の進路選択や困難に向き合う場面で、子どもたちを静かに支える力になっていることが分かってきました。職場体験で出会った大人の姿、地域の課題について考えた時間、仲間と対話した経験が、時間を経て意味を持ち、人生の土台となっていくのです。

北中城村型キャリア教育は、地域と学校が協力し、子ども一人ひとりの未来に向き合い続ける取り組みです。思いや経験だけに頼るのではなく、調査結果をもとに振り返り、改善を重ねてきました。こうした積み重ねが、地域への信頼を育て、次の世代へと受け継がれていくと考えています。

最後になりますが、本日のシンポジウムが、地域や立場、世代の違いを越えて、子どもたちの未来をどのように支えていくのかを共に考える機会となりましたら幸いです。これまで関わってくださったすべての皆さまに心より感謝申し上げるとともに、今後も地域と学校が手を携え、子どもたち一人ひとりの歩みを丁寧に支え続けていくことを願い、私からの実践報告とさせていただきます。

【シンポジウム】

【司会】

【座覇真理子】

後半のシンポジウムの進行は、座覇真理子と三村隆男が担います。まずパネリストの方に順番に基調講演及び実践報告についてご発言をいただきます。

【パネリスト発言】

【三村隆男】

沖縄戦では約 20 万人、朝鮮戦争では約 200 万人の市民、軍属の死者を出しています。こ

うした戦争での多大な犠牲を踏まえ、平和をどのように考えるかが今回の基本テーマです。エーリヒ・フロム『悪について』からの示唆を現代に当てはめますと、現状への不満や将来への不安はそのままでは破壊的エネルギーとなりますが、一方で人間にある創造の潜在力を刺激し、生産的に生きることで過去の傷をいやし、創造的エネルギーを発揮することになります。子どもが「何かを生み出したい」「友達と協力したい」「社会に貢献したい」という社会的・職業的自立を促すことこそ、キャリア教育の基本的なスタンスであり、こうした創造的エネルギーは戦争に結びつく破壊的エネルギーの抑止力となるのです。これこそキャリア教育と平和との接点と考えております。

今日一日を通して強く感じているのは、キャリア教育というものが、単に進路選択や職業選択の問題ではなく、「どう生きるか」という問いそのものに関わっているという点です。先ほど金氏、喜屋武氏、座覇氏からお話がありましたが、いずれも制度論だけでは語れない、人の経験や関係性に根ざした実践でした。

私は長くキャリア教育の研究に関わってきましたが、近年とくに感じているのは、キャリア教育が「格差」とどう向き合うかという問題です。格差を外から測って是正する対象として扱うのではなく、当事者が自ら向き合い、乗り越えようとする過程をどう支えるのか。その視点が非常に重要だと考えています。

沖縄の実践は、その点で示唆に富んでいます。困難な状況を前にしながらも、それを嘆くだけではなく、地域の力を生かし、子どもたちの可能性を信じて実践を積み重ねてきました。そこに、キャリア教育と平和を結びつける一つの答えがあるのではないかと思います。

【宮古紀宏】

私は本日、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターの立場から、生徒指導の機能を通した良好な学習環境の形成についてお話しします。本発表は、基調講演者である金氏、喜屋武氏、座覇氏のご報告を受け、それらを学習環境および学校風土の観点から読み解くことを目的としたものです。

まず、日本における生徒指導の定義について確認します。2022 年に改訂された『生徒指導提要』では、生徒指導は特定の担当者が行う活動ではなく、「機能」として位置づけられています。すなわち、教科指導、特別活動、総合的な学習の時間など、学校におけるあらゆる教育活動を通して、すべての教職員が担う支援の総体であるとされています。このような整理は日本独自の特徴であり、韓国にも類似の考え方はあるものの、その制度的な位置づけや構造には違いがあることを指摘します。

次に、生徒指導の構造について、四層構造で理論化されている点を説明します。すべての子どもを対象とした基盤的な支援を土台とし、課題の予防、早期発見・早期対応、そして継続的・専門的支援へと段階的に整理されています。とりわけ新たに重視されているのが「発達支持的生徒指導」という考え方です。これは、日常的な挨拶や声かけ、励まし、賞賛、対話といった関わりを通して、子どもと教師との信頼関係を丁寧に築いていくことを中核に据えるものです。

良好な学習環境の形成という点では、学力のみならず、社会性、感情面、身体的発達を含めた子どもの全人的成長を支える環境が、学校・家庭・地域において総合的に整えられていることが不可欠です。アメリカとの共同研究からも、子どもが学校や家庭、地域との「つながり意識」をもつことが、学習や適応に大きく寄与することが明らかになっています。

このつながり意識を育む要因として、私は三点を挙げます。第一に、子ども自身が大人から

の温かみや思いやりを実感できること。第二に、大人から高い期待をかけられていると感じられること。第三に、地域やコミュニティの活動に参画し、自分が周囲に影響を与え、貢献しているという実感をもつことです。

基調講演における喜屋武氏、座覇氏の地域連携キャリア教育の実践には、私自身も強い感銘を受けました。特に座覇氏の涙に込められた思いから、地域の大人が子どもに向ける温かさと期待の力をあらためて実感しました。こうした地域との関わりを通して、子どもたちは自分の住む街や社会の一員であることを実感していくのだと思います。

今後、日本においても、学校・家庭・地域が一体となり、子どものつながり意識を育む支援を一層重視し、推進していく必要があると考えています。

【岡部敦】

私は現在、長野県の清泉大学で教職課程を担当するとともに、日本キャリア教育学会の国際交流委員長として、この 10 年間、国際的な研究交流に携わってきました。2023 年には金氏とともにオランダ・ハーグの平和宮を訪問しましたが、本日の日韓ラウンド・テーブルも、日本キャリア教育学会の取り組みとして継続的に行われている重要な対話の場であると考えています。

私は大学で教育制度論を教えており、近代公教育の成立過程を重視しています。近代国家成立以前は、暴力的手段による支配が社会を規定していましたが、市民革命を経て近代国家が成立し、その条件として、国民全員に平等な教育を保障する公教育制度が求められるようになりました。

公教育の目的は、民主主義国家の形成と、個人の人格発達・真理の探究という二つに整理できます。しかし、全員に同じ内容を同じ方法で教える一斉授業だけでは、多様な子どもたちに十分に応えることは困難です。現在の学校教育では、福祉と教育の統合、個人の選択可能性の拡張、ケアやケア・アビリティといった視点が重要になっています。

この観点から、座覇氏による沖縄県北中城村での実践を三点で捉えました。第一に、教室の外で学ぶことの重要性です。学びが社会に開かれ、教室での学習の意味を子ども自身が実感できる点が特徴的でした。第二に、学びの目的が単なる適応ではなく「形成」にあることです。離職率対策から始まった取り組みではありますが、地域への関心や主体性、社会参画意識を育てる市民形成の目的が明確に含まれていると感じました。

第三に、社会を考える場としての機能です。労働や雇用を既定のものとして受け入れるのではなく、改善していく視点が示されています。村長が先頭に立ち、学校・地域・産業の三者協働を進め、いずれも教育的視点を共有している点を高く評価しました。

さらに、カナダの高校職業教育研究から導かれた「民主的学習原理」を紹介しました。生徒の理性的判断力を尊重すること、労働をめぐる多様な視点を取り入れること、そして職業社会は民主的参加によって再構築可能であると学ぶことです。

キャリア教育・職業教育は、学習者の主体性を育て、労働の主体となる若者を育成する教育です。この主体性こそが民主的社会の基盤であり、民主主義は平和へとつながります。1947 年制定の教育基本法が示すように、民主主義の実現は教育の力に委ねられており、その中核をキャリア教育・職業教育が担うと、私は考えています。

【シンポジウム】

【司会】

【三村隆男】
　これからシンポジウムに入りますが、ここでは今日一日の議論を踏まえ、いくつかの論点を確認したいと思います。第一に、キャリア教育は、進路や職業選択に限定されるものではなく、「生き方」そのものを扱う教育であるという点です。これは、日本でも韓国でも共通して確認できた視点だと思います。第二に、キャリア教育は、学校内部で完結するものではなく、地域社会や行政、企業との関係性の中で成立するという点です。沖縄の実践は、そのことを具体的に示していました。
【金】
　私も同感です。キャリア教育は、競争のための教育ではなく、多様な価値を認め合う社会をつくるための教育だと考えています。その意味で、今日の議論は、キャリア教育と平和が自然につながることを示していました。
【喜屋武】
　現場の立場から言えば、子どもたちが「自分は大切にされている」と感じられる経験が、すべての出発点だと思います。その積み重ねが、結果、地域や社会を支える力につながっていきます。
【座覇】
　私自身、実践の中で感じているのは、大人が変わらなければ、子どもは変わらないということです。キャリア教育は、子どものための教育であると同時に、大人自身の学びの場でもあると感じています。
【宮古】
　今日の議論は非常に示唆的でした。子どものキャリアを長期的な視点で支える仕組みづくりの重要性を、改めて認識しました。
【岡部】
　日韓で状況は違っても、教育が果たす役割の本質は共通しています。こうした対話を継続すること自体が、キャリア教育の実践だと言えるのではないでしょうか。

【司会】
【座覇真理子】
　それでは、会場からのご質問をお受けしたいと思います。
質問①（会場参加者）
　本日の議論を聞いて、キャリア教育と平和の関係が非常によく分かりました。一方で、学校現場では学力向上や進学指導が優先され、キャリア教育に十分な時間が割けないという声もあります。こうした状況をどのように乗り越えればよいでしょうか。
【三村】
　重要なご質問だと思います。キャリア教育を「学力と対立するもの」と捉えると、どうしても後回しになります。しかし、今日の議論で確認されたように、キャリア教育は学びの意味づけそのものに関わる教育です。学力を高めることと切り離すのではなく、学ぶ理由を子ども自身が理解できるようにする。その視点に立つことで、両者は対立しないと考えています。
【宮古】
　現在は教科横断的な学びや探究的学習が重視されています。ですが、生徒指導やキャリア教育、つまり、社会性や感情面、進路に対する学習について、時間としても確保して、既存の教育活動の中に位置づけることも重要ではないかと考えています。

質問②（会場参加者）

沖縄の実践は非常に魅力的ですが、他地域でも同じように展開することは可能でしょうか。沖縄ならではの条件に依存している部分はありませんか。

【喜屋武】

よくいただく質問です。沖縄には独自の歴史や文化がありますが、私たちが大切にしてきたのは「地域にあるものを生かす」という姿勢です。やり方をそのまま移すのではなく、それぞれの地域に合った形に組み替えていくことが重要だと思っています。

【座覇】

私も同感です。重要なのは制度やプログラムよりも、人と人との関係づくりです。どの地域にも、子どもを思う大人は必ずいます。その力をどうつなぐかがポイントだと思います。

質問③（会場参加者）

日韓の比較という視点から見て、今後、特に共同で取り組むべき課題は何だとお考えでしょうか。

【金】

共通の課題は、競争が激しい社会の中で、若者が自分の価値をどのように見いだすかという点だと思います。日韓は制度や文化は違いますが、若者が感じている不安には共通点が多い。その点について、今後も対話を続ける意義は大きいと考えています。

【岡部】

比較すること自体が目的ではなく、互いの実践から学び合うことが大切だと思います。今回のようなラウンド・テーブルは、そのための非常に貴重な場だと感じています。

質問④（会場参加者）

今後、このラウンド・テーブルをどのように発展させていく予定でしょうか。

【三村隆男】

本日の議論を踏まえると、このラウンド・テーブルは一度きりの成果発表の場ではなく、継続的な対話の場として位置づける必要があると感じています。先ほど金氏からも言及がありましたが、次回はチェジュ島での開催も視野に入れながら、対話を積み重ねていくことが重要だと考えています。

【司会】

【三村隆男】

本日のシンポジウムを通して、キャリア教育と平和をめぐる議論が、より具体的な課題として共有できたように思います。

最後に、未来学者アルビン・トフラーは『第三の波』で世界の歴史は「暴力」「富」「情報」とそのパワーが移行していくと予測しましたが、現代のデジタル情報社会の出現はその予測を実証しました。人間は破壊的な戦争で世界の破滅を選択せず、豊かな世界を求めつつあります。ここまでは創造の潜在力の存在の証明でしょう。こうした創造の潜在力を引き出す教育活動がキャリア教育なのです。

キャリア教育は、制度として完成させるものではなく、実践を通して問い続けていく営みです。このラウンド・テーブルが、その問いを共有し続ける場として、今後も発展していくことを願っております。